



奇妙なタマゴ

テトラクリスタルアイランド

時刻は夜。

雲は無く、綺麗な星空が広がっている頃。

島の住人達は夢の中。

個々がそれぞれの夢を見ていた。

「ZZZZ・・・」

族長であるストレンジャー達も、それぞれの住処で夢を見ていた。

だが突如、

グラグラグラッ！！

島が大きく揺れだしたのだ。

簡単に言うと、大き目の地震が起こったのだ。

ポフッ！

「??? 何だ？」

ストレンジャーは寝ていたベットから落ち、掛けていた布団の上に落ちた。

ビリーブも共に起き、目を擦っていた。

「ん？ 揺れてますね・・・ 地震??」

だがつい先ほどまで寝ていたため、頭がまだ起きておらず、考えが中々まとまらなかった。

だがそこまで長い地震ではなく、すぐに収まった。

「ビリーブ、大丈夫か？」

ストレンジャーは近くに置いておいた月影草の光を頼りにビリーブを見た。

「はい、ストレンジャーさんも大丈夫ですか？」

「ああ、布団の上に落ちたからな。怪我は無いよ。」

ストレンジャーは立ち上がり、辺りを見渡した。

だが特に変わった所は無く、外もそこまで変わったところは無かった。

「外傷は特に無いみたいだな。」

「そうですね。まだ夜だから良く見えませんが。」

ストレンジャーとビリーブは外を見つつ言った。

「ちょっと俺、他の住人達を見てくるよ。」

「あ、僕も行きます。」

二人はすぐに靴と手袋を装着し、二人は窓から外へ飛び出した。

アルドール達も同様に行動を起こしており、島の住人達のケガの状況を見て回った。

幸いけが人は誰もおらず、家にも支障は無く、被害は0だった。

「特に無いみたいだな。戻ろうか。」

「ふあああ・・・そうですね。」

ビリーブはあくびをしつつストレンジャーに言い、族長達はそれぞれの家へ戻っていった。

そして朝。

夜の地震のせいもあり、今日は少し遅めの起床となった住人達。
だが早く起きた人物は変わらず、ストレンジャーだった。

「うーん。」

ストレンジャーはベットの上で体を伸ばし、ベットから出て窓から外を見た。

『夜も見たけど、特に異常は無いみたいだな。』

辺りを一通り見渡し、ピリブを起こさないように靴を履き、外へ飛び出した。

ストレンジャーは昨日の地震が少々気になり、空から島全体を見て回った。

『特に無いみたいだな。 気のせいだったのか。』

ストレンジャーはしばらく考え納得し、花畑へ向かって行った。

ストレンジャーは花畑の近くまで飛んで行き、地上周辺で羽ばたきつつ地面へ降り立った。
花達も昨日の地震の影響は受けておらず、綺麗に咲いていた。

『花も異常なし、ってことはやっぱり、ただの地震だったのか。』

ストレンジャーはジョウロを拾い、水泡草の水を少々貰い、花達に水をやった。

『今日も綺麗に咲いてくれよな。 ん？』

ストレンジャーはふと、花畑に奇妙な物を発見した。
それは黄色くて丸い、球体の物体だった。

「なんだコレは？ タマゴ？」

ストレンジャーは物体を拾い、観察し始めた。
見た目は黄色とクリーム色の波模様のタマゴらしきもので、暖かかった。

「タマゴ、みたいだな。 でも誰のタマゴなんだろう・・・」

ストレンジャーは辺りを見渡したが、それらしき人物はおらず、少々迷っていた。

「・・・とりあえず、持って帰るか。」

ストレンジャーはタマゴを抱え、家へ戻っていった。

ストレンジャーが家へ帰ると、ビリーブが外にいた。

「ビリーブ、おはよう。」

「あ、ストレンジャーさん、おはようご？ え！？」

ビリーブは挨拶をしつつストレンジャーの抱えていたものを見て、驚いていた。

「ストレンジャーさん！？ どこからそんなものを拾ってきたんですか??？」

「ああ、なんか花畑に落ちていたんだ。 ちょっとどうしようか迷ったけど、持って帰ってきたんだ。」

「そ、そうですか。 タマゴですか？」

ビリーブはストレンジャーが抱えているタマゴらしき物を観察しつつ言った。

「ああ、なんか暖かいから、タマゴだと思うんだけど。」

「うーん。 特に中から音はしませんけど。 タマゴでしょうかね・・・」

二人は似たような反応をしつつ、タマゴを見つつどうしようか迷っていた。

タマゴからの孵化

テトラクリスタルアイランド

突如島にやってきた地震。

突如出てきた謎のタマゴらしき物体。

ストレンジャーとビリーブはそのタマゴを見つつ、どうしようか悩んでいた。

「あら二人とも、どうしたの？」

ストレンジャーとビリーブが外で立往生していると、家から母龍が出てきた。

「母さん。 おはよう。」

「おはようございます。」

「おはよう二人とも。 . . . ? それは？」

母龍はストレンジャーの抱えていた物を見つつ言った。

「ああ、さっき花畑で拾ってきたんだ。 タマゴだと思うんだけど。 どうしたらいいかわかんなくて。」

「あら拾ってきたの？」

「一応辺りを見たんだけど、持ち主と思われる人はいなかったんだ。」

「捨てられてたのかしら。 でもタマゴなんだし、暖めた方がいいわね。 セっかくだから、孵してみましようか。」

母龍はそう言うと、いったん家へ戻り、家からタオルの入ったバスケットを持ってきた。

「それは？」

「ストレンジャーがまだタマゴの中に入っていた時に使っていた物よ。 この中に入れて、暖めてあげなさい。」

母龍にそう言われ、ストレンジャーはタマゴと思われる物体をバスケットに入れた。

「じゃあ私は出かけてくるから、留守番頼むわね。」

「ああ、わかった。」

「行ってらっしゃいませ。」

母流はタマゴをひとまず置き、仕事へ出かけていった。

「俺もタマゴの中の時もあったんだな。 全然気にもしなかったぜ。」

ストレンジャーはバスケットに入ったタマゴを見つつ言った。

「確かにこのバスケット、取っ手が大きめの物が入るようになってますもんね。 タマゴ専用なんでしょうか。」

「とりあえず、暖めるか。」

ストレンジャーはバスケットを抱えつつ、家へ入っていった。

ストレンジャーはバスケットに入ったタマゴを、自分の寝る時に使っているベットに置き、上から毛布を掛けた。

「とりあえずコレで大丈夫かな。 日は午前中はずっと入ってるから、暖かさは問題ないだろ。」

「そうですね。 太陽光でも十分に暖かいですから。」

ビリーブはついでに、自分の布団を窓に出し、干した。

「こんにちはー」

「遊びに来たぜ。」

二人は自室で作業をしていると、アルドール達がやってきた。

「あ、いらっしゃい皆。」

「こんにちは。」

「二人して何してるの？ ？」

アルドールは部屋を見渡しつつ、ベットの盛り上がりが気になり、近くへ。

「？ 何が入ってるの？」

アルドールは盛り上がりを軽く突きつつ、ストレンジャーに問いかけた。

「ああ、ちょっとタマゴを孵そうと思って、暖めてるんだ。」

「タマゴ？」

ピスフリー達も気になり、ベットの近くへ行き中を覗いた。

中にはバスケットに入ったタマゴがあった。

「本当だ。 タマゴだ。」

「ストレンジャーの??」

ジョイはなんとなくそう思い、問いかけた。

「そんなわけ無いだろ。 俺たちはまだ子供だぜ？」

「それもそうね。」

毛布を下ろし、三人は立ち上がった。

「で、どうしたんだ3人して。」

ストレンジャーはピスフリーに問いかけた。

「ああ、ちょっと昨日の地震が気になってな。」

「朝散策をしてたら皆に会ったの。」

「で、ストレンジャーに会いに。」

「何かわかったか？」

「なーんも。」

三人とも同じ反応をし、ちょっとおかしかったらしく、5人は苦笑した。
すると、

コツコツ

ふと物音がした。

「？　なんか音しなかった？」

「そういえばしたな。」

ストレンジャーは物音がしたと思い、音のした方へ。
すると布団の中からコツコツと音がした。

「タマゴからみたいだな。」

ストレンジャーは毛布をめくり、中を覗いた。
するとタマゴの上部の殻が取れており、中から何かが顔を出していた。

「お、孵化したみたいだぜ。」

ストレンジャーがそう言うと、4人は毛布をめくり、タマゴを見た。
するとタマゴの中からは、黄色の龍が顔を出していた。

幼龍の行動

テトラクリスタルアイランド

ストレンジャーの布団の中で暖めていたタマゴ。
するとすぐに物音がし、タマゴから龍が生まれた。

「うわあ、龍の子！」

「かわいいー」

生まれたばかりの子龍は、タマゴから乗り出し、布団の上に落ちた。
全身黄色で小さい羽の生えた、綺麗な皮膚をしたドラゴンだった。

「龍のタマゴだったのか。」

「すごい物を拾ってきたのね。」

「かわいいですねー」

それぞれは感想を言いつつ、子龍を見た。
子龍はなれない歩きをしつつ、前へ進んでいた。
目的地はストレンジャーの様子。

「？ 俺の所に来たいのか？」

ストレンジャーは子龍が来るのを待ちつつ、抱き上げた。
龍はとても軽く、ストレンジャーに抱かれつつ寄りかかった。

「やっぱり軽いな。 それに綺麗な色。」

「でも誰の子なのかしらね。」

「でもどうするんだ？ スtrenジャー」

子龍を抱いているストレンジャーに、ピスフリーは問いかけた。

「まあ孵化させたんだし、とりあえずは面倒を見るよ。 このままにしておくわけにもいかない
しな。」

「まあそれもそうか。」

「それにしてもかわいいー。 私にも抱かせて。」

ジョイは手を出し、子龍を抱こうとした。
すると

カプッ

「え？」

なんと子龍は自分で動き、ジョイの両手をそれぞれ歯の無い口で噛んだ。
歯は無いものの、結構な力だった。

「いったーい！！！」

ジョイは手を引っ込め、噛まれた部分を撫でつつ言った。

「もうなんなのよ！！」

「ずいぶんと素早く動いたな。」

「ああ、大丈夫かジョイ？」

ストレンジャーは子龍を抱えつつ、ジョイに問いかけた。

「まあ歯が無かったからいいけど、ずいぶんと力があるのね。」

「この様子だと、他の人たちもダメか？」

ピスフリーは子龍に手を出しつつ言った。

すると子龍は同じく手を噛もうとし、ピスフリーは手を引っ込めた。

「みたいだな。 危ない危ない。」

「ストレンジャーのことがよほど気に入ったのね。」

「それ以外は対象外か。」

アルドールは子龍を見つつ言った。

子龍はストレンジャーの胸にくっ付き、離れようとはしなかった。

「参ったな。」

「だとすると、本当に世話をしないといけないな。」

「でも小さい龍って、何を食べるんですか？」

「そういうのは知らないな。 なんだろうな。」

ストレンジャーは子龍を抱え、下へ降りていった。

4人もあとに続いていく。

「ええっと、幼児用の食品なんてあったかな？」

ストレンジャーは一回子龍を片手で抱きつつ、キッチンの収納スペースを漁ってた。

「そういえばそういうのは見ませんね。」

「キッチンは母さんの代わりに掃除をするぐらいだからだったからな。 . . . 何もなさそうだ。」

二人は一回搜索を止め、今度は冷蔵庫を見た。

「うーん。 どれがいいんでしょうか。」

「普通に考えたら、ミルクなのかな。」

ストレンジャーとビリーブは冷蔵庫の中を見つつ考えていた。

ツンツン

「？」

すると子龍は何かを銜え、ストレンジャーを突いた。

子龍はソーセージの入った袋を銜っていた。

「ソーセージを食べたいのか？」

ストレンジャーは子龍に聞くと、子龍は頷いた。

「たしかコレ、ビリーブのだったよな。食べても大丈夫か？」

「はい、せっかくですから与えてみましょうか。」

ストレンジャーは子龍からソーセージを受け取り、ビリーブに一回子龍を預け、ソーセージを炒めた。

「とりあえず炒めたけど、歯が無いから食べられるのかな。」

ストレンジャーはお皿に移した炒めたソーセージを持ってきた。

「心配はいらなそうですよ。」

ビリーブは子龍を見つつストレンジャーに言った。

なんと子龍には歯が綺麗に生えそろっていた。

「ずいぶんと早い成長だな。こんなに早いものなのか？」

「そうなのでしょうか。」

「でもま、それなら食べられるんじゃないか？」

子龍はビリーブの膝の上から飛び出し、ストレンジャーの元へ。
そして、持っていたソーセージを食べ始めた。

「食べられそうだな。」

「そうになると、主食はソーセージね。」

5人はそんな子龍の様子を見ていた。

「おいしいか？」

『うん。 おいしいよ。』

子龍は声ではない、ちょっと変わった方法で返事をした。

「しゃべるのはまだ無理みたいだな。」

「でも返事はしたぜ？」

「え？ でも私達には聞こえなかったけど。」

4人には特に聞こえておらず、ストレンジャーにしか聞こえなかったのだ。

『テレパシー、なのか？』

『うん。 すとれんじゃー』

子龍はストレンジャーの顔を見つつ言った。

「まあ意識はあるみたいだな。」

ストレンジャーは急激な成長にちょっと戸惑いつつも、子龍の食事を見守っていた。

夜の出来事

テトラクリスタルアイランド

その後しばらく時間が過ぎ、アルドール達は家へ帰っていった。
家では、ストレンジャーとビリーブ、そしてストレンジャーの胸にくっ付きっぱなしの子龍がリビングにくつろいでいた。

「そういえば、その子の名前はどするんですか？」

「そういえばまだ名前が無かったな。」

『なまえ？』

ビリーブはふと思い、名前を考え始めた。

『どんな名前がいいんだ？』

『すとれんじゃーがつけてくれるなら、なんでもいいよ。』

ストレンジャーは心の中で子龍に問いかけると、子龍は返事をした。

「名前は何でもいいんだと。俺が考えたのならって。」

「じゃあストレンジャーさんが考えないとダメですね。何にしますか？」

「そう言われてもな。」

ストレンジャーは考え、名前に良さそうな言葉を探した。

『うーん。名前なんて考えたこと無いからな。何がいいかな。』

『なんでもいいよ。』

子龍はストレンジャーの顔を見つつ、ストレンジャーの心の中で答えた。

ストレンジャーはしばらく子龍の顔を見つつ考え、結論を出した。

「そうだな、明るい『グロウ』っていうのはどうかな。」

「グロウですか、明るくて優しい感じでいいですね。」

『お前はどうか？』

ストレンジャーは心の中で唱え、子龍に聞いた。

『ぼく、ぐろう？ うん、いいよ、すとれんじゃー。』

「子龍さんはなんて？」

「OKだと。 グロウ、よろしくな。」

「よろしくね。 グロウさん。」

『よろしく、すとれんじゃー、びりーぶ。』

「ただいま、二人とも。 あら。」

三人がリビングで会話をしていると、母龍が帰ってきた。

「もう孵ったの？ 可愛いわね。」

「ああ、名前はグロウっていうんだ。 今決めたんだ。」

「そうなの。 グロウさん。 よろしくね。」

『？？ だあれ？』

『俺の親だ。』

『おや？？』

子龍は首を傾げつつストレンジャーと母龍を見た。

「今夕飯を作るから待っててね。」

「あ、僕も手伝います。」

母龍はエプロンをし、キッチンへ向かっていった。

ストレンジャーはグロウを抱えたまま、リビングのソファに座っていた。

数分後

「ストレンジャーさん、グロウさん。 ご飯が出来ましたよ。」

キッチンにいたビリーブはストレンジャーとグロウに向かっていった。
ストレンジャーはグロウを抱え、キッチンへ向かっていった。

今日のディナーはスープ。

「いただきまーす。」

「うーん。 今日のもおいしい！」

ビリーブは美味しそうにスープを飲んでた。

「本当、おいしい。」

ストレンジャーもスープを飲むつつ言った。

「グロウさん、美味しいかしら？」

母龍はテーブルの上に座っているグロウに聞きつつ言った。
ストレンジャーはスプーンにスープをいれ、グロウに与えようとした。
だがグロウは口を開けず、首を振った。

『たべたくない。』

「あら、どうしたの？」

「食べたくないって。」

ストレンジャーはグロウの言った事を二人に言った。

「どうしてでしょうか。 美味しいのに。」

ビリーブはスープを見つつ言った。

「どうしたんだ？ グロウ。」

ストレンジャーはグロウの顔を見つつ問いかけた。

『すとれんじゃーのつくったものじゃなきゃ、たべたくない。』

「グロウさんは何て？」

「俺の作ったものじゃなきゃ食べたくないって。」

ストレンジャーは少々困りつつビリーブと母龍に言った。

「あらあら、困ったわね。」

母龍も少々困った顔をした。

「でもそういわれたのでしたら、作るしかありませんね。」

「ああ、そうだな。 でもグロウ。 あんまりわがまま言うのは良くないぜ？ ・

『・・・うん。 でもいや。』

「はいはい。」

ストレンジャーは少々しつけをしつつも、キッチンへ向かっていった。

そして数分後、ストレンジャーはトロピカルアイランドから持ってきたフルーツを使ったサンドイッチを作ってきた。

「おまたせグロウ。」

テーブルの上にいるグロウにストレンジャーは言うと、グロウがテーブルから飛んできた。そしてサンドイッチの乗ったお皿の上で美味しそうに食べ始めた。

『おいしいー！！』

「あら。 本当にストレンジャーの作ったものじゃないと食べないのね。」

「でもどうしてそこまでこだわるんでしょう？」

ビリーブはグロウを見つつ言った。

『どうしてそこまで俺の作ったものにこだわるんだ？』

ストレンジャーは心の中でグロウに問いかけた。

『だって、すとれんじゃーのつくったものじゃないと、あんしんできないんだもん。　すとれんじゃーいがいのひとだとこわい。』

『でも俺の友人や家族だぜ？』

『でもいやなの。　ぼくがゆるすのは、すとれんじゃーだけ。』

グロウはサンドイッチの乗ったお皿の上から飛び、ストレンジャーの胸にくっ付いた。

「俺以外は信用できないんだと。」

「そうなんですか。　でもどうしてでしょうか？」

「まだわかんないな。　でも、時期にわかるんじゃないかな。」

ストレンジャーはグロウの頭を撫でつつ言った。

その後食事を終え、三人は部屋へ戻って行った。

部屋に行くときも、グロウはストレンジャーにくっついたままだった。

「じゃあそろそろ寝ましょうか。」

ビリーブは布団をひきつつ言った。

「グロウはどこで寝るんだ？」

『ぼくはすとれんじゃーとねたい。』

「グロウさんはなんて？」

「俺と寝るんだと。」

ストレンジャーは毛布を直しつつ言った。

「今日一日ずっとストレンジャーさんといっしょですね。」

「そういえばそうだな。 一時期ビリーブに預けたぐらいだからな。」

ストレンジャーは今日の出来事を思いだしつつ言った。

『ビリーブの事も信用できないのか？』

『すとれんじゃーのつぎにしんようできるかな。 でもすとれんじゃーがいい。』

グロウはストレンジャーにくっつきつつ言った。

「じゃあ寝ようか。」

ストレンジャーは部屋の電気を消し、ベットへ向かっていった。

「お休みなさい。」

ビリーブも布団の中に入り、目を閉じた。

『お休みグロウ。』

ストレンジャーはグロウの頭を撫で、仰向けで寝てしまった。

グロウはベットの上からストレンジャーの上へ移動した。

ちょうど胸の上に行き、そこでうつ伏せになった。

『・・・お休みなさい。』

グロウはストレンジャーの上で目を瞑り、寝てしまった。

テトラクリスタルアイランド

夜が終わり、朝がやってきた。
月は沈み、太陽の光が島に降り注いでいた。

「うーん。」

島にやってきた太陽の光と共に、ストレンジャーが目を覚ました。

『ん？ 体が重い。』

ストレンジャーは自分の身に何が起こったのか確認した。
すると、ストレンジャーの胸の上にグロウが乗っていた。
だが昨日とは違い、随分と大きくなって寝ていた。

『随分と急成長したな。』

ストレンジャーはグロウを抱えつつ起こさないように体を起こした。
体を起こしても、グロウは寝息を立てたままだった。
グロウは昨日とは違い、片手で抱くことが出来ないくらいに大きくなっていて、
体はもちろん、翼も大きくなっていて。

『龍ってこんなに急成長するものだったのか？』

ストレンジャーはゆっくりとグロウを先ほどまで寝ていたベットの上へ置き布団を掛けた。
そして窓辺に。

「うーん。 今日もいい天気だな。」

ストレンジャーは朝日を浴びつつ体を伸ばした。
そして、朝食を取りに行った。

数分後、

「うーん。」

同じ部屋で寝ていたビリーブが目を覚まし、布団から出てきた。
部屋を見渡すと、ベッドにストレンジャーの姿が無かった。
変わりにグロウが寝ていた。

『もう起きたんですか。 やっぱり早起きですね。』

ビリーブは体を伸ばし、グロウを見た。

『あれ？』

ビリーブはグロウを見つつちょっと疑問に思った。

『昨日こんなに大きかったのでしょうか？』

ビリーブは昨日までのグロウを思い出しつつ今のグロウを見た。

『成長したってことでしょうか・・・』

「うーん。」

ビリーブがグロウを見ていると、グロウが目を覚ました。
グロウは自分の下に体が無いことを確認すると目を一気に見開いた。

「あれ？」

グロウは自分の下にストレンジャーがいない事を知ると、部屋を見渡した。

「おはようございます、グロウさん。」

「ストレンジャーは！？」

グロウはあたふたしつつストレンジャーを探した。

「多分食事を取りに下へ行ったんだと思いますよ。」

ビリーブにそう言われ、グロウはベットから飛び出し歩いて扉へ向かって行った。だがドアノブが高い位置にあるため、届かない。

「届かないー」

グロウは背伸びをしつつドアノブに触れようと頑張っていた。ビリーブはそんなグロウを見て苦笑しつつ、グロウを抱えドアノブの届く位置へ。グロウはドアノブを回しドアが開くと、ビリーブの腕の中から飛び出し下へ降りた。だが階段があったため、着地に失敗しそのまま転がって落ちていった。

ゴロゴロゴロゴロッ！！

「グロウさん！！」

「ん？」

下で食事をしていたストレンジャーは物音のした方を見た。するとそこには階段を転がって落ちてきたグロウが涙目をして座っていた。転がり落ちたグロウの元へビリーブは急いで走り降りていた。

「どうしたんだグロウ！？」

ストレンジャーは席を立ち、グロウの元へ。

「うう・・・ スtrenジャー！！」

グロウはストレンジャーを見つけると、涙を流しつつストレンジャーに抱きついた。

「どうしたんだ？」

ストレンジャーはグロウを抱きつつ涙を流すグロウに問いかけた。

「起きたらストレンジャーさんの姿が無いと知って、慌てて降りたら階段だったため転倒したんです。」

ビリーブは階段を下りつつ、先ほどまでグロウが取っていた行動を話した。

「寂しかったのか？」

「・・・うん。」

グロウは涙を流しつつストレンジャーに言った。

「起きたらストレンジャーの温もりはあったのに、鼓動が聞こえなかった。」

グロウはそう言った。

「鼓動？」

「俺の鼓動って、ここか？」

ストレンジャーは自分の胸に手を当てつつ言った。

グロウは頷いた。

「生まれた時から聞いてるんだもん。 聞こえないと寂しい・・・」

「そういえば、タマゴの時から持っていたのは俺だったな・・・」

ストレンジャーはグロウが生まれる前とそのあとの事を思い出しつつ言った。

「じゃあストレンジャー以外はダメって言うのは。」

「同じ鼓動の持ち主じゃないからってことか。」

ストレンジャーはグロウの頭を撫でつつ聞くと、グロウは頷いた。

「そっか。 ゴメンな勝手に出歩いて。」

ストレンジャーは納得するとグロウを抱えつつ、先ほどまで食事を食べていた席に戻った。

「今度からはいっしょに起きようか。」

「・・・うん。」

グロウはストレンジャーに返事をし、テーブルの上に降り立った。

ビリーブは別の席に座り、母龍の作った朝食を食べ始めた。

ストレンジャーは昨日と同様にグロウのために食事を作り、グロウといっしょに食事を取った。

その後二人はストレンジャーが世話をする花畑へ出かけて行った。

「うわぁー お花がたくさん咲いてる！」

「俺が毎日世話をしてた場所だからな。 花も生き生きしてるだろ。」

ストレンジャーは隅に置いておいたジョウロを取り、水をやった。

水を浴びた花々はキラキラと光っていた。

「綺麗ー」

グロウは花を見つつ言った。

「珍しいのがあるな、ストレンジャー」

二人が花畑にいと、森からコレージが出てきた。

「ようコレージ。 おはよう。」

「おはようストレンジャー」

「だあれ？」

グロウはコレージを見つつストレンジャーのそばに行き尋ねた。

「コレージだ。 俺の友達。」

「友達？」

「そう、友達。」

「お前は誰だ？」

コレージは姿勢を低くしグロウに問いかけた。

「僕グロウ。」

「グロウか。 よろしくな。」

コレージはグロウを見つつ言った。

グロウは飛び上がり、ストレンジャーの背中にくっついた。

『どうしたんだ？』

『ちょっと怖い・・・』

ストレンジャーはテレパシーでグロウに問いかけると、返事が返ってきた。

『どうしてだ？』

『血の匂いがする。』

グロウはストレンジャーの背中で小刻みに震えていた。

『血？』

「ああ、古傷からかな。」

不意にコレージは言った。

「昨日ちょっと開いちゃったんだ。 手袋も洗ったつもりだったんだけど。」

コレージは手袋を見つつ言った。

「コレージ。 聞こえてたのか？」

「俺は二人の思考を読んだだけだ。 読心術が使えるって言わなかったか？」

「いや、初耳だな。」

「そうか。」

コレージはグロウを見つつ言った。

「確かに血の匂いはするか。 結構嗅覚に敏感なんだな。 お前。」

「僕のここといじめない？」

グロウはストレンジャーの背中から少し顔を出しつつ言った。

「いじめないよ。 俺の友達だからな。」

「それに、ストレンジャーもいるだろ？」

コレージがそう言うと、グロウは背中から飛び出しコレージの元へ。

グロウはコレージが手を出すと素直に抱かれた。

そしてコレージの胸にくっついた

『優しい音・・・』

グロウはコレージの鼓動を聞きつつ目を瞑った。

「何してるんだ？」

コレージは少々戸惑いつつ言った。

「グロウは鼓動に敏感なんだ。 心は己を写すからな。 平気かどうか確かめてるんじゃないかな。」

「鼓動って心臓のか。」

「そういうこと。」

ストレンジャーはコレージに説明しつつ言った。

グロウはしばらくすると顔を胸から離しコレージを見た。

「俺はどういう人物だったんだ？」

「昔、大きな出来事で心と体に傷があった。でも今は傷は無い。過去に傷を埋められる事があったの？」

「そうだな。ストレンジャーに埋めてもらったって所かな。」

コレージは少々顔をそらしつつ言った。

「そうなんだ。今はとても優しいけど認めた人じゃないとこうして話をしないんだ。」

「そ、うだな。」

周りを気にせず結構ズバズバとグロウは言った。

「それくらいにしとけグロウ。あんまり人の心を読みすぎるのもよくなんだよ。」

「うん。」

グロウはストレンジャーに言われ、コレージの元を離れてストレンジャーの中に。

「ストレンジャーと同じで優しい鼓動がしたよ。」

「そっか。仲良く慣れそうか？」

「うん。」

グロウはコレージを見つつ言った。

「俺と仲良くしても、何も無いと思うがな。」

コレージはそう言うと森に姿を消した。

テトラクリスタルアイランド

コレッジと別れ、東側エリアへ戻ってきたストレンジャー
腕の中にはグロウを抱えて。

「見た目と心の中は違うんだね。」

グロウはストレンジャーに抱かれたまま言った。

「そうだな。 見た目と同じ人がほとんどかも知れないが、コレッジみたいに優しい人もいるんだぜ。」

「うん。」

グロウはそう言うと、ストレンジャーから離れ地面に足をつけた。
地面に足をつけたグロウはそのままストレンジャーの家へ向かって行った。
そこにはビリーブとピスフリーの姿が。

「あ、お帰りなさいストレンジャーさん。」

「よう。 おかえり。」

「二人ともどうしたんだ？」

ストレンジャーは二人の元へ近づきつつ言った。
グロウはストレンジャーから離れ、ビリーブのそばに行った。

「抱っこしてー」

グロウはビリーブを見つつ言った。

「あ、はい。」

ビリーブはグロウを抱えた。

「なんだ、昨日とはずいぶんと態度が違うな。 どうかしたのか？」

ピスフリーはグロウを見つつストレンジャーに問いかけた。

「いや、コレとって何も無いよ。ただグロウに興味本意が出たのかもしれない。」
「興味ね・・・」

ピスフリーはビリーブに抱かれたグロウを見つつ言った。
グロウはコレージ同様にビリーブの胸にくっつき、目を閉じた。

『二人と違うけど、やっぱり優しい音・・・』

「? どうかしたんですか？」

ビリーブはグロウの行動を見つつ言った。

『みんなの心を知ろうとしてるのか？』

『昨日何も知らずに噛んだりしちゃったから。仲良くなりたい。』

「皆と仲良くなりたいたいと。優しい人だと確認してからみたいだけだな。」

「そうなんですか？」

「ずいぶんと変わった方法だな。」

二人が会話をしているとグロウは目を開けた。

「ビリーブはどんな人なんだ？」

ストレンジャーはグロウに問いかけた。

「ストレンジャーと違って強い鼓動じゃないけど、でも優しい人なのはいっしょだった。」

グロウはビリーブの顔を見つつ言った。

「優しい人でよかったです。」

『でも、ストレンジャーやコレージといっしょで、皆過去に事件があるんだ・・・』

グロウは声には出さず心の中で言った。

その後ビリーブの元を離れピスフリーにくっついた。

「こ、今度は俺か??？」

ピスフリーは少々ドギマギしつつ言った。

グロウは胸にくっつき目を閉じた。

「なんか心の中を覗かれてるみたいで、なんとも言えないな・・・」

「すべてお見通しって所ですね。」

ビリーブはグロウを見つつ言った。

グロウは目を開けピスフリーを見た。

「力強い鼓動だった。 誰よりも平和を求めている人なんだ。 性格は今と過去と違ったんだね。」

「う、本当にお見通しみたいだな・・・」

ピスフリーは困りつつ言った。

「グロウ、そろそろ戻ってこいよ。」

ストレンジャーはそう言うとグロウはストレンジャーの元へ。

「さっきも言ったけど、見すぎるのはいけないんだぜ？ 触れて欲しくない事もあるんだからな。」

「うん。 わかった。」

グロウはそう言うと、ストレンジャーの腕の中で丸まり、寝てしまった。

「ビックリしたぜ。 グロウにそんな能力があったなんて。」

「今日わかったことだからな。 でも、本当に鼓動だけで俺たちのことがわかってしまうんだからすごいな。」

「偽り無く、全部当たってるからな。」

ストレンジャーは自分の腕の中で眠るグロウを見つつ言った。

「それにしても、グロウさんは本当に何者なんでしょうかね？」

ビリーブは不意に言った。

「確かにな。ただのドラゴンにしては、能力が目覚しいし。」

「それに成長もすごいからな。」

「肌の色が黄色なのも気になりますね。」

三人はグロウを見つつ言った。

グロウはストレンジャーの鼓動を聞きつつ、安らかな夢の中へ入っていった。

グロウの存在

テトラクリスタルアイランド

ピスフリーと別れ時間が経ち、夜。

ストレンジャーとビリーブは家へ戻り、ディナーを終えリビングでのんびりしていた。

グロウは相変わらず寝ており、ストレンジャーに抱えられて寝ていた。

「ZZZ・・・」

「グロウさん、起きそうにありませんね。」

ストレンジャーの向かい側のソファに座っていたビリーブは、グロウを見つつ言った。

「もう5時間ぐらい寝てるもんな。このまま朝まで寝てるのかな。」

ストレンジャーはグロウの頭を撫でつつ時計を見た。

時刻は9：00を示していた。

「そろそろ寝る時間ですね。」

「そうだな。」

二人はソファから立ち上がり、自室へ向かって行った。

「？ あら二人とも、もう寝るの？」

キッチンから出てきた母龍はストレンジャー達に問いかけた。

「はい、そろそろ寝ようかと。」

「わかったわ。三人とも、お休みなさい。」

「お休みなさい。」

「お休み。」

二人は母龍に挨拶をし、自室へ向かって行った。

二人は部屋に戻ると、毛布を整え、寝られるようにした。

「ストレンジャーさん。 グロウさんはどうしますか？」

「今日の様子だと離れさせるわけにもいかないからな。 隣に寝させるよ。」

「わかりました。」

ビリーブはそう言うと、部屋の電気を消しに行った。

ストレンジャーはグロウを自分の隣に寝かせ、毛布をかけた。

「ストレンジャーさん。 グロウさん。 お休みなさい。」

「お休みビリーブ。」

ビリーブは寝床に入り、目を閉じた。

グロウはストレンジャーの隣ですでに夢の中。

ストレンジャーもベットの中に入り、眠ってしまった。

深夜・・・

ストレンジャーやビリーブ。 島の住人達が夢の中の時。

月明かりに照らされ、一つの家から影が顔を出していた。

しばらくすると、その影は家の中に戻っていった。

月の時間が終わって太陽の時間。

島に太陽の日差しが照らし始めた。

「うーん。」

窓から入ってきた日差しで目が覚めたストレンジャー。

『ん？』

だが昨日の朝同様に自分の体が重い。

少しベットの上へ移動し、自分の体を見た。

そこには金色に染められたかの様な大きな翼と、手が乗っていた。

ストレンジャーは自分の横を見ると、そこにはさらに大きくなったグロウの姿があった。

大きすぎて尻尾がベットから落ちていた。

『また随分と成長したな・・・』

「う、うーん。」

ストレンジャーがグロウを見ていると、グロウが目を覚ました。

「おはよう、グロウ。」

「おはよう ストレンジャー ふぁ〜」

グロウはストレンジャーの体に置いていた左手を退かし、眠気眼を擦った。

「グロウ。 また大きくなったか？」

「うん。」

グロウはベットから降り、自分の足で立ち上がった。

グロウは昨日とはさらに比べ物にならないくらいに成長しており、ストレンジャーの二倍くらいの大きさになっていた。

ストレンジャーとは違い、足や腕は太く、首が長い。

「グロウ、お前何者なんだ？」

ストレンジャーはベットに腰掛けたまま、グロウに問いかけた。

「僕？ ストレンジャーとはちょっとした関係にある龍なんだよ。 なんだかわかる？」

グロウはちょっとイタズラっぽくストレンジャーに言った。

「俺と関係が？」

「そうだよ。」

「・・・って事は、四神と何かあるのか？」

「アタリ。」

グロウはビリーブの邪魔にならないように部屋に座り込んだ。

「僕はね、黄龍っていう存在なんだ。 四神の中心的な存在。」

「ってことは、四神の最後の力である『地』の力を使えるのか？」

「うん。 そういうこと。」

グロウは笑顔でストレンジャーに言った。

「僕はね、四神が集まったときとかに現れないんだけど、ストレンジャーに会いたくて地上に来たんだよ。」

「俺に、会いたかった？」

グロウはうなずいた。

ストレンジャーは少々理解できず、グロウに聞きなおした。

「でもなんで会いたかったんだ？」

「僕はこうして地上に出るまで、大地の中で四神の行動を見てるんだ。 今までしてきた行動は全部、知ってるんだよ。」

「俺が島を脱出したときもか？」

「ううん、そこまでは知らないんだ。 まだ生まれたばかりって言うのもあるから。」

グロウは大体知っていることをストレンジャーに話した。

「で、つい最近地震が起こったでしょ？」

「ああ、三日前だったかな。」

ストレンジャーは数日前のことを思い出しつつ言った。

「あれ、僕が起こしたんだ。」

「えっ？ グロウが？」

「うん。 大地の力を使って、僕を地上まで運んでもらったんだ。 本来の姿でストレンジャーに会いたくて。」

「そうだったのか。」

ストレンジャーは大体話の内容を聞き、整理しつつ言った。

「それで、今の状態が本来の姿なのか？」

「うん。 まだ小さいから、この姿なんだ。 大人だともっと大きいんだよ。」

グロウは自分の手や足、翼を見つつ言った。

「本来の姿になるまで、自分の能力はわからないんだ。 でもここ数日でわかった。 自分は鼓動に敏感で、相手の心を操作できるんだね。」

「鼓動で相手を操作できるのか？」

「本来の鼓動に別の鼓動を入れて、その行動が出来るようにするんだ。 ちょっとやってみるね。」

グロウはそう言うと、目を瞑り、爪と爪を当ててテンポを作った。

その音を聞いているのはストレンジャーとビリーブ。

すると、

フワッ

『？ なんだ！？』

その音を聞いていた二人は、段々と空へ浮かび始めた。

翼を使っていないにも関わらずストレンジャーは浮いていた。

同様に寝ているビリーブも浮いていた。

「グロウが、やっているのか？」

「うん。 そうだよ。」

グロウは目を瞑りテンポを作りつつストレンジャーに言った。

「こうやって音を奏でて、自分の好きな相手に好きな行動を起こさせることが出来るんだ。 誰にでも出来るんだよ。」

「そうだったのか。 じゃあ鼓動を聞いていたのも、その技に関係あるのか？」

浮いたままのストレンジャーはグロウに問いかけた。

「ううん。 違うよ。」

グロウは首を振り、音を出すのを止めた。

するとストレンジャーとビリーブはゆっくりと地面に降りた。

「あれはまだ成長段階だったからなんだけど、存在それぞれで鼓動は違うでしょ？ それで相手がどんな人なのかを確かめてたんだ。 今は聞きたいときに聞けるんだよ。」

「俺に寄り添わなくても、俺の鼓動が聞こえてるのか？」

「うん。 今でもストレンジャーの優しい鼓動が聞こえてる。」

グロウは目を瞑りつつ言った。

「僕はストレンジャーの事が大好きだよ。 誰に対しても強くて優しい、その名にふさわしい存在だ ってね。」

グロウは笑顔でストレンジャーに言った。

「グロウ、これからどうするんだ？」

ストレンジャーはグロウに問いかけた。

「ここじゃあなんだから、外でもいいかな。」

「ああ。 わかった。」

そう言うと、グロウは部屋の窓から外へ出た。
地面へ着地しても、体に見合った振動は無かった。

『音が無い。』

ストレンジャーは部屋を出て階段を降り、外へ。

外には朝日を浴びていたグロウが立っていた。

「今音がしなかったのはね、そういう風にしたからなんだ。」

「力を使ったからか？」

「うん。」

グロウはストレンジャーを見つつ言った。

「心が読めるのも、鼓動か。」

「もうわかったんだね。 やっぱりすごいなー、ストレンジャーは。」

グロウはストレンジャーに背中を向けつつ言った。

「乗って。」

グロウがそう言うと、ストレンジャーは素直にグロウの背中に乗った。

「しっかり掴まっててね。」

グロウはそう言うと、上空へ一気に飛び出した。

島の上空はすがすがしい天気、雲は無かった。

「俺初めてだな。 他の人に乗せてもらって空へ行くの。」

「いつもストレンジャーが一人で行ったり、自分が運んだりだったもんね。 気分はどう？」
「ああ、すがすがしいぜ。」

ストレンジャーは上空の風に吹かれ髪を靡かせたまま言った。
空の風はいつもとはまた違い、とても気持ちのよい風が吹いていた。

「これからどうするかだったね。」

グロウは不意にストレンジャーに言った。

「僕のこれからはね、他の場所へ行って、いろんな人たちを見てくるよ。 また大地に戻ってね。」

「じゃあこの姿でいられるのは。」

「うん。 今だけだね。」

グロウは言った。

「もともと人前には現れない存在だから、そう長くはいないんだ。 用があった時にしか現れない。 それが黄龍なんだ。」

「そうだったのか・・・」

ストレンジャーは少々顔を俯かせつつ言った。

「力を悪用する人はいる、みんなそうなんだ。 誰であっても力があればそれを使う。 善にも悪にも。 そういうことはさせないためにも、普段どおりで入ることが大切なんだ。」

「・・・」

「以前似たような事をコレージが言ってたね。 それに、大地にいるのが僕の仕事でもあるんだ。」

「そうか。」

ストレンジャーはグロウに寄り添った。

「お前はいつでも、そうやって俺たちの事を見てたのか。 誰にも感謝されない、気付かれないが、そばにいたのか。」

「ゴメンなグロウ。 気付いてやれなくて、何もしてやれなくて。」

ストレンジャーは目を強く瞑ったまま涙を流した。

「俺の事をずっと見ていた。 誰よりも見守っていてくれていたのに。 もうお別れだなんて。俺まだグロウになにもしてないのに。」

「そんな事無いよ、ストレンジャー。」

グロウは空を飛びつつストレンジャーに言った。

顔は見えないが、泣いていることは鼓動を聞いてわかっていた。

「僕はストレンジャーと過ごして、楽しかったよ。 力を悪用しない、皆に酷いことをしない。いつでも自分である。 それに、ストレンジャーの作ってくれたお料理、美味しかったよ。」

「グロウ……」

「だから泣かないで。 ストレンジャー言ってたでしょ？ 『俺は皆の涙が見たいんじゃない。

笑顔が見たいんだ！』って。 龍でそういう考えを持つ人、いないんだよ。 龍はもともと残酷な存在なんだ。 ストレンジャーはそれを変えた。 僕はそれを学んだ。」

グロウも少々涙ぐみながら言った。

「それに、僕が今の状態じゃなくなっても、ストレンジャーのそばにいる。 また会えるんだよ。」

「…… そうだったな。」

ストレンジャーは涙を拭いつつ言った。

「短い間だったけど、ありがとうなグロウ。」

「僕もだよ、ストレンジャー。」

その後二人は再び島へ足を着けた。

グロウはストレンジャーを地面に降ろし、ストレンジャーの方へ振り返った。

「じゃあそろそろ行かないと。」

「そっか。 皆に言っておくことあるか？」

ストレンジャーは不意に思い、グロウに問いかけた。

「ううん。 コレはお別れじゃないんだもん。 無いよ。」

「そうだったな。」

ストレンジャーは思いなおし、言った。

「また会おうね。 スtrenジャー！」

「またな。 グロウ！」

二人は握手をした。

グロウはそのあと光となって姿を消し、大地へ帰っていった。

「あ、いたいた。 おはようございます。 スtrenジャーさん。」

グロウと別れたストレンジャーの元に、家から出てきたビリーブが声をかけた。

「おはようビリーブ。」

「あの、グロウさんを知りませんか？ 姿が見えないんですが。」

ビリーブはストレンジャーに問いかけた。

「グロウはちょっと旅に出て行ったよ。 『皆によろしく』ってな。」

「そうでしたか。 また会えますよね。」

「あえるさ。 必ずな。」

ストレンジャーは朝日を見つつ言った。

ビリーブも朝日を見た。

「朝ご飯。 食べましょうか。」

「そうだな。」

二人は家へ戻っていった。

その後朝食を終え、ストレンジャーは花畑へ。
昨日と同じように、草花が元気に咲いていた。

「おや？」

ストレンジャーがジョウロで水をやっていると、一輪だけ違う花が咲いていた。
5つの花びらを持った、黄色い花だった。

『グロウ。 これからも俺たちを見守っていてくれよな。』
『もちろんだよ。 スtrenジャー。』

ストレンジャーはそう思いつつ、その花にも水をやった。
また会えるときを信じて。

—E P I S O D E E N D—